（２）事業結果説明

〔事業の実績〕

(1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和５年４月１日～令和６年３月３１日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
コーディネーター配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会指導・助言					○					○		
学校設定科目の研究開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
地域課題に関する課題研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課題研究発表会						中間発表			○	○	○	○
広報及び情報発信			○		○		○	○				
教育課程・研究推進新学科設置検討・開発・実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 事業の実績の説明

① カリキュラムの研究・開発について

特色ある学びの実現に向けた文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、本校における現在の「知の探究コース」の改編を進め、令和６年度の新学科設置に向け、カリキュラムの検討を行った。本校や地域の実態やふまえ、高校生の多様な能力や適性、興味や関心等に応じた学びを実現することが必要であり、生徒が多様な学びに接することができるような教科横断的な学びが展開できるかを研究した。本校では従来のコースでの取組を基盤に、普通教育に特色や魅力を加えた新学科「地域科学探究科」を設置する上での課題を抽出、研究開発を進めた。

生徒がこれまでコースで培ってきた学びの深化の形として、協働と個人の行動を重視した新学科で「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に地元の丹波地域をフィールドにして地球規模で活躍する人材を育成するカリキュラムの開発を掲げた。改編の方向性や内容として、文理融合型の課題研究を軸としたカリキュラム、地域の教育資源を活用して地域課題の解決に取り組む学びを軸としたカリキュラムのあり方や方向性を提案し、教育課程委員会や教科会等で検討を行った。探究的な学びを深化させるために、現在の「総合的な探究の時間」を含めた探究的な学びを７単位に増やすことを踏まえた研究を継続して行った。

スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーに基づいて、生徒に身につけさせる資質・能力の明確化、資質･能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化、入学時に期待される生徒像を検討し、新学科のスクール・ポリシーを設定した。育成するべ

き資質・能力に関する評価方法の適切な設定のため、現在のコースでの取組を新学科につなげていくため内容を検討し、開発を進めた。今後は校内での共通理解をめざし、さらに改善を進めていく。３年間を通じた体系的なカリキュラムを研究協議し、教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定、学校設定教科を軸とした、探究活動を軸にしたカリキュラムの設定を検討した。申請当初計画していた学校設定科目の名称や内容を精査する中で、「ポスター英語」や「教科横断型探究」の設定と授業展開のあり方、各教科の配置やバランス等を考慮し、全体の枠組みや教育内容を年度末までにまとめた。

今後、探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びや ICT を活用した海外との国際交流の機会を提供する等、カリキュラムの開発にあたって、必要に応じて、地域や関係機関等の人的、物的な支援が必要である。

ア　スクール・ミッションに基づく新学科におけるスクール・ポリシーの策定

スクール・ミッション 校訓「進取創造」「質実剛健」「敬愛和協」の理念のもと、主体的に物事にチャレンジし、多様な価値観を理解し協働する力を備え、人類や地域社会に貢献する人材を育成する。	
スクール・ポリシー	**育成をめざす資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）** ① 探究活動を通して主体的な学びのスキルを培う。 ② 丹波から世界への視点を持ち、探究活動を通して多様な価値観を理解する。 ③ グループ研究を通して協働力を育成し、問題解決能力を培う。 ④ 探究活動の成果報告を通して他の取組も理解し、切磋琢磨する中での成長を促す。 ⑤ フィールドワークを通して実社会の理解を深め、自己探究によって自己理解も深める。
	教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー） ① 地域から世界への視点を持つ問題解決能力を育成するため、地域や大学と連携した探究活動を実施する。 ② 社会の仕組みや問題点を的確に捉える力を育成するため、フィールドワークを実施する。 ③ 論理的思考力を培うことで学習に対する意欲を育成するため、教科横断的探究を実施する。 ④ 積極的に表現するスキルを身につけるため、自己探究を通して自己理解を深める。 ⑤ 教科探究を通して、自己の興味関心に基づいた学習を提供する。
	入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー） ① 好奇心を持ち、意欲的に探究活動を行う生徒を募集する ② チームの一員として課題に対し、協力し合う意識を持った生徒を募集する。 ③ 地域社会へ貢献し、持続可能な社会の一員となる生徒を募集する。

イ　外部人材を招聘した講演会や探究活動に関する指導

探究Ⅰ＆丹BALⅠにおいて、SDGｓの13番に注目し、生徒が丹波市の「ゼロカーボンシティー宣言」の内容をより正確に理解し、生徒自身が疑問や課題を持ち、主体的に探究活動に取り組むことを目的に講演をしていただいた。

探究Ⅱにおいて、探究活動の魅力を理解するため、神戸大学農学部のゼミ生や京都大学の院生であり鳥取大学の助教の先生にご指導や講演をしていただいた。

また、「知の探究」発表会において、関西学院大学名誉教授が研究に向かう原動力になっている魅力についての講演をしていただく。

	内容	実施日	講師
1	助言「探究Ⅱ研究中間発表」	９月２１日	神戸大学助教 小川　景司
2	講演「丹波市ゼロカーボンシティー宣言」	９月２８日	丹波市役所 足立　幸一
3	講演「持続可能な街の未来をデザインしよう！」	１０月５日	京都大学院生 吉野　和泰
4	講演「あなたの発見を、重要な発見にするために」	３月７日	関西学院大学名誉教授 高畑　由起夫

ウ　国際交流発表会

日　時　　令和５年12月20日

交流国　　インドネシア、フィリピン、台湾、ミャンマー、ベトナムの高校生

対　象　　第２学年全員

内　容　　国際交流をしつつ自国の課題や問題点などを話し合い、探究の成果を発表し合い、意見交換を行った。

エ　令和６年度教育課程表（案）

第1学年　　丹BALⅠⅡⅢは総合的な探究の時間

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	21	22	23	25	26	27	28	29	30	31	32
1年	現代の国語		言語文化		歴史総合		数学Ⅰ			数学A		物理基礎		化学基礎		体育			保健	芸術Ⅰ		英語コミⅠ			論理・表現Ⅰ		家庭基礎		情報Ⅰ		丹BALⅠ	LHR
	②		②		②		③			②		②		②		⑦～⑧			②	②		③			②		②		②		③～⑦	
	2		2		2		3			2		2		2					1	2		3			2		2		2		1	1

注）「英語コミ」→「英語コミュニケーション」の略

第2学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
文系	論理国語		古典探究		地理総合		公共			数学Ⅱ			数学B		体育		保健		英語コミⅡ			発展国語Ⅰ＊	生物基礎		発展化学＊		世界史探究 日本史探究		丹BALⅡ		ポスター英語＊教科横断型探究Ⅰ	LHR
																							②		1		③					
																							2				3					
理系																							生物基礎		生物 物理		化学					
	④		④		②		②			④			②		⑦～⑧		②		④			1	②		④		④		③～⑦		1	1
	2		2		2		2			4			2		2		1		4				2		2		2		2			

理系理科は「生物基礎･生物(4単位前後期)」と「生物基礎(2単位)」+「物理(2単位)」の2グループに分かれる。

第3学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
文系	論理国語		古典探究		体育		英語コミⅢ				論理・表現Ⅱ		メディアイングリッシュ＊		世界史探究 日本史探究			政治経済		応用理科＊		発展国語Ⅱ＊			発展数学＊				教科横断型探究Ⅱ＊	丹BALⅢ		LHR
													2			③			②			2										
理系													地理探究			生物 物理				化学					3 数学Ⅲ							
	④		④		⑦～⑧		④				②		③			④				④					③		②			③～⑦		
	2		2		2		4				2		3			4				4					3		2		1	2		1

理系生徒が数学Ⅲを履修しないで「数学研究」を履修することは可能。

②　運営指導委員会の体制および取組

氏名	所属・職	備考
高畑　由起夫	関西学院大学　名誉教授	学校教育に専門的知識を有する
杉岡　秀紀	福知山公立大学　准教授	学校教育に専門的知識を有する
中瀬　勲	兵庫県立人と自然の博物館　館長	学識経験者
藤江　康彦	東京大学大学院　教授	学校教育に専門的知識を有する
足立　環	丹波市観光協会　会長	関係機関の責任者
小森　真一	丹波市教育委員会　学校教育課副課長	関係行政機関の職員
新谷　浩一	兵庫県教育委員会　高校教育課長	管理機関

令和5年度の運営指導委員会は2回開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者、自治体関係者、地域関係機関等の委員から助言を受けた。また、委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言を行った。

	実施日	実施内容
第1回	8 月 28 日 ※対面、オンライン同時実施	・新学科設置に向けての現状と課題の共有 ・3年間の探究関係カリキュラムについて ・現在の取組と探究活動について協議
第2回	1月 25 日 ※対面、オンライン同時実施	・今年度の取組状況についての報告 ・今後の推進についての指導・助言

③　コンソーシアムの体制および取組

所属	機関の代表者
丹波市	市　長　林　　時彦
丹波市教育委員会	教育長　片山　則昭
丹波県民局	局　長　上田　浩嗣
丹波市商工会議所	会　頭　篠倉　庸良
丹波市観光協会	会　長　足立　環
丹波医療センター	院　長　大野　伯和
丹波市国際交流協会	会　長　山口　直樹
福知山公立大学	准教授　杉岡　秀紀
兵庫県教育委員会	高校教育課長　新谷　浩一

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムや OB のつながりを活かした協働体制の構築を目指し、人材育成のための探究活動に取り組み、学びの質の向上をめざした。特に今年度は、市役所の各課や市内の公共施設に協力いただき、地域課題解決のための学びを支援いただいた。

④　コーディネーターの配置および活動内容

所属	氏名
NPO 法人 imagine 丹波	鴻谷　佳彦
丹波市市民活動支援センター	一宮　祐輔
神戸学院大学講師	久保　哲成

学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを大切に、令和６年度の新学科設置に向けた準備で協力した。生徒の探究活動を進めるにあたって、地域の状況や課題、情報共有、関係機関との調整、フィールドワークの対応などで協力、支援を行った。

1　地域や大学と学校の架け橋
2　探究活動をするプログラム開発の協力、支援
3　探究活動における生徒の躓きを発見し、的確なタイミングでアドバイスができる環境づくり。

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
鴻谷　佳彦	日数	5	3	5	4	6	4	4	4	3	3
	時間	28	28	35	28	33	28	28	28	21	28
一宮　祐輔	日数	4	3	4	4	4	4	4	4	3	3
	時間	23	20	24	27	27	28	28	25	21	28
久保　哲成	日数	7	8	7	8	7	6	6	5	6	3
	時間	30	33	35	30	33	25	28	27	27	36

⑤　管理機関における事業全体の成果検証、評価

運営指導委員会での検証として、担当指導主事による継続的な評価及び指導を行った。外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価、大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価を、次年度以降の事業につなげる。

コンソーシアムでの検証は、担当指導主事による継続的な関与及び助言を行い、コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価、校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価を基に事業の取り組みへの改善に活かす。

活動日程	活動内容
8月28日	第1回運営指導委員会 ・新学科設置に向けての現状と課題の共有し、今後の方向性について協議
1月25日	第2回運営指導委員会 ・今年度の取組について、成果・評価・課題を総括・指導助言 ・来年度の取組について、概要を説明し、協力体制について打合せ
3月7日	「知の探究」発表会を主催（丹波の森公苑） ・コースの生徒による探究成果発表の場を提供し、学びの機会を提供 ・県下全校及び全国普通科改革指定校に案内し、本校の取り組みを公開する

⑥　管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

県立柏原高等学校には、令和6年度の新学科設置に向けた支援として、探究活動を効果的に取り組むことを目的とした「探究ルーム」の整備に400万円の支援を行った。整備された「探究ルーム」では授業、探究活動などで生徒の学びの深化につながり、より充実した取組となるよう支援した。

なお、令和5年度については学科開設準備にかかる支援として非常勤講師の時間数を増やすこととしている。

⑦　新学科の設置及び設置に向けた検討の関係者（生徒、保護者、地域等）への説明の実施

学校の教育活動をあらゆる機会に発信して広報活動に尽力するとともに、オープン・ハイスクール等では中学生やその保護者、地域への説明を行う。オープン・ハイスクールは年間4回実施した。

第1回　7月　中学校訪問　生徒が出身中学校へ出向き、現在行っている探究活動の実践を発表する。あわせて、学校紹介を行う。

第2回　8月　オープン・ハイスクール・知の探究コース説明会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッション、国際交流について、先輩と語るなどを企画し、学校を紹介する。生

徒が説明する。

第3回 10 月　教諭による中学校訪問

本校教諭による市内中学校訪問を実施し、各中学校の3学年担当者や進路指導担当者に直接説明する機会を設け、中学生を直接指導される先生方に新学科の教育内容の理解を求め説明する。

第4回 11 月　秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動の紹介、高校生と語ろう（進学相談）を行う。

今後、新学科の教育内容をまとめた広報用資料等を活用し、教育活動や行事等を整理し紹介する。学校関係者や発表会での説明を通じて新学科への理解を促す。

⑧　成果の普及のための仕組み

新聞等への取材依頼、ホームページへの掲載、オンラインの活用等を通じて、生徒の学びの質が高まるような工夫や取組を行った。

主な発表実績は以下の通りである。

9 月 22 日　普通科改革事業指定校発表会

11 月 8 日　先進校視察（福岡県立八幡高等学校）

12 月 17 日　甲南大学リサーチフェスタ 2022　2年知の探究コースの個人研究発表

12 月 17 日 「総合的な探究の時間」共創イベントにおける実践発表会（東京学芸大学）

1月 25 日 「地域課題から世界を考える日」（本校）

2月 10 日　兵庫県立高等学校探究活動研究会（神戸コンベンションセンター）

3月 7 日 「知の探究」発表会（丹波の森公苑）

今後、大学等が実施する発表会、研究会への参加を継続すると共に、全国、世界で活躍する卒業生を巻き込み、事業への理解と協力体制を構築していく。成果の普及のためにオープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーションに取り組めるよう関係者への理解と協力を促進する。

⑨　国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

学校とコンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくりに取り組む。新学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりが求められる。国の指定期間内で、それぞれの機関と更なる連携・協働を行い、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「地域全体の学び」となるよう更なる仕組みを構築する。

同時に、国の指定期間後もコーディネーター機能が維持できるよう、コーディネーター加配に関する予算の確保、教職員のコーディネーター機能の移行、企業協力による人員配置等の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。コーディネーターの配置では予算面での支援が必要である、連携先はあるが、講義等で協力いただく際の予算や資金面でのバックアップも必要である。調整に多大な労力を要することがあり、コーディネーターが入っても教員への負担が大きく、業務改善にも取り組んでいくことが必要である。

（3）研究推進部活動内容

本年度、研究推進部という部署を設置し、新学科に向けての準備や3年間を見越した探究的な学びのプログラム構築を目指しつつ、新学科の準備を以下のとおり活動しました。

年度当初は、研究推進部とコーディネータの役割をはじめ、新学科を踏まえた3年間の探究的学びのプログラムの方向性について何度も検討を繰り返しながら、運用もしました。

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	探究学習ガイダンス（全学年）	地元企業
5月	カリキュラム開発（通年）	関西国際大学
6月	フィールドワーク	地元企業
7月	全国コーディネーター研修	丹波市・丹波篠山市教育委員会、小学校、中学校
8月	第2学年中間報告会 運営指導委員会 夏のオープンハイスクール、新学科説明会 フィールドワーク	丹波市・丹波篠山市教育委員会、小学校、中学校 関西学院大学、東京大学、福知山公立大学 地元企業、観光協会、商工会議所、兵庫県立人と自然の博物館 丹波医療センター
9月	丹波市出前講座（ゼロカーボンシティ宣言）	丹波市役所、地元企業
10月	秋のオープンハイスクール 京都大学出前講座	丹波市・丹波篠山市教育委員会、小学校、中学校 鳥取大学
11月	全国コーディネーター研修 先進校視察（福岡県立八幡高等学校） フィールドワーク引率	長崎県教育委員会、愛知県教育委員会
12月	甲南大学リサーチフェスタ 東京学芸大学「探究の共創」 新学科プロジェクト会議	甲南大学、東京学芸大学 岡山県立勝山高校
1月	地域課題から世界を考える日（警報のため中止） フィールドワーク引率 運営指導委員会 新学科プロジェクト会議	関西学院大学、東京大学、福知山公立大学 地元企業、観光協会、商工会議所、兵庫県立人と自然の博物館 兵庫県立豊岡聴覚特別支援学校
2月	全国コーディネーター研修 全国コーディネーターフォーラム 令和5年度兵庫県探究研究会 新学科プロジェクト会議	兵庫県立尼崎高等学校
3月	「知の探究」発表会（7日実施予定） 職員研修会（東京大学　藤江教授）	東京都立篠崎高校

1　通年

1）　カリキュラム開発・指導体制の確立

令和 6 年度から新学科で行う探究活動のシステム・体制づくり

現行のプログラムをブラッシュアップ

令和 7 年度以降（新学科第 2 学年以降）に行う内容の提案・吟味

2）　新学科生徒募集

新学科の内容 PR

2 度のオープンハイスクール（夏・秋）、各中学校への広報活動

2　時期別

1）　全国コーディネーター研修（7、11、2月）

全国の同事業を推進する学校・自治体・管理機関と意見交換

実施にあたっての指導を受ける

2）　発表会の企画・運営・引率

中間発表、地域課題から世界を考える日、「知の探究」発表会の企画・運営

関係機関、同事業推進校の招待、配信

外部へは、本年度は 3 回エントリー（甲南大、東京学芸、兵庫県）

3）　運営指導委員会

指導委員の方から意見をいただき、ブラッシュアップする。

3　課題

1）　先進校への視察

全国の推進校と関係ができたため、予算のある次年度のうちに先進校の取り組みを学びたい。

2）　コーディネーターの維持

本年度はコーディネーター3 名の体制で行ってきたが（次年度は 2 名の予定）、予算の都合上令和 7 年度以降の目途が立っていない。

3）　探究活動の浸透

授業の実施を通して、学校全体で指導できるような形が少しずつ作りたい。

（4）新学科（地域科学探究科）の３年間の探究プログラム

令和6年度 新設

「知の探究コース」が新学科になりました

地域科学探究科

3年間の「探究的な学習活動」スケジュール

教育目標

地球規模の視点に立ち、地域との協働による探究活動を通して、社会の持続的な発展や価値の創出に貢献し、自分の将来にも結び付けていく論理的思考力や多角的な問題解決能力を育成する

1年			2年	3年	
1学期	2学期	3学期	1～3学期	1学期	2学期 3学期
丹 BAL Ⅰ 探究基礎講座	丹 BAL Ⅰ 探究基礎実践	丹 BAL Ⅰ まとめ発表	丹 BAL Ⅱ 探究基礎実践	丹 BAL Ⅲ 探究発表 丹 BAL Ⅲ 自己探究	丹 BAL Ⅲ 教科探究
			ポスター英語 教科横断型探究Ⅰ	教科横断型探究Ⅱ	

進路実現のための4つの充実した探究的な学習活動

自身のスキルを磨く 充実した探究活動　丹 BAL Ⅰ 丹 BAL Ⅱ 丹 BAL Ⅲ

1
テキストを利用しミニ探究
⇒ グループで探究基礎実践
⇒ 個人で自由な探究応用実践
⇒ 校外で探究発表会

思考力を磨く 教科横断型探究　ポスター英語 教科横断型探究Ⅱ

2
様々な進路に対応した思考力を磨く
教科を超えた知識の組み合わせ
解を創造する思考力
身につけた力を社会で生かす

自分の魅力を発見し 表現スキルを磨く自己探究　丹 BAL Ⅲ 自己探究

3
自己理解の深化と創造性を開花
自己の成長と自己肯定感の向上
自己の魅力を言語化するスキル

教科の魅力を探究する 教科探究　丹 BAL Ⅲ 教科探究

4
学びたい教科の学びを深める
進路実現のための教科の探究
自己啓発やスキルの向上
成果や達成感の実感

（５）第１回運営指導委員会

○日　時：令和５年８月２８日（月）　１０：３０～１２：００
○場　所：柏原高校　柏陵会館１階研修室　および　オンライン（Zoom）
○内　容
１　開　会（１５分）
■挨　拶：校長　荒木　和仁
　　兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事　上月　さやこ
■出席者紹介
■運営指導委員長の選出・挨拶

２　報告事項
■令和４年度の成果および新学科設置に向けた取り組み（荒木校長）（１０分）
・新学科名「地域科学探究科」に決定
・スクールミッション、スクールポリシー
・設置検討体制の整備：研究推進部の設置（教務部、総務部とも連携）
　　教育課程委員会（教育課程の検討）
　　コーディネーター配置、地域・関係機関との連携
・情報発信・広報
　記者発表（３月）、中学校説明会（６月）、オープンハイスクール（８月・１０月）
　中高連携の強化、ホームページ等で情報発信
〈質疑応答〉

■新学科の教育内容および各学年の探究授業…研究推進部より（１５分）
・１学年
・２学年
・３学年
〈質疑応答〉

３　意見交換（４０分）
■新学科設置に向けた取り組み、体制について
　オープンハイスクールの状況、生徒募集の課題、地域連携のあり方等
■各探究授業の内容、評価、改善について
■高校間連携および大学・行政・地域との連携の可能性
■柏原高校の教員の専門性向上に向けての研修等の充実

４　今後の予定、その他（１０分）
・令和６年１月２５日（木）「地域から世界を考える日」　→　第２回運営指導委員会

５　閉　会

○第１回運営指導委員会　記録

出席者(敬称略) 高畑由紀夫(関西学院大学　名誉教授) 杉岡　秀紀(福知山公立大学地域経営学部　准教授)　オンライン 藤江　康彦(東京大学大学院教育学研究科　教授) 足立　環(丹波市観光協会会長)　　オンライン 小森　真一(丹波市教育委員会　副課長) 上月　さやこ(兵庫県教育委員会事務局高校教育課　主任指導主事) 荒木　和仁(兵庫県立柏原高等学校　校長) 髙橋　義尚(兵庫県立柏原高等学校　教頭) 尾花　尚史(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部長) 原　孝拓(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部副部長) 津田　五台(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部　臨時講師) 鴻谷　佳彦(コーディネーター)　　オンライン 欠席者　中瀬　　勲(人と自然の博物館長)　一宮　祐輔(コーディネーター) 久保　哲成(コーディネーター)

１、開会

運営指導委員長の選出：高畑由紀夫(関西学院大学　名誉教授)

副委員長：杉岡　秀紀(福知山公立大学地域経営学部　准教授)

２、報告事項

（１）R4 年度成果及び新学科設置に向けた取り組みの説明

・新学科名決定「地域科学探究科」

・スクールミッション、スクールポリシー、アドミッションポリシーの説明

（２）R4 の成果

①丹 BAL1、2 の導入　連携のあり方に課題がある。

②グローカルの設定「３年」→来年度は 7 単位のため新しい科目を導入

メディアイングリッシュは名称変更を予定

③広報

各中学校へのポスター配布、HP による広報、丹波新聞

HP の広報について課題がある。

④コーディネーター

外部との連携、校内での調整に課題がある。

⑤外愚機関との協働

（３）　実施計画

①2 年目（今年度）の実施内容

・探究ルームの活用推進カリキュラムの決定

②3 年目の予定

・丹 BAL 7 単位（前年は 3 単位）にし、教科横断型の学習の授業の設定。

③国の指定終了後の説明

３、質疑応答（取り組み内容等に対する）敬称略
（杉岡）：出身中学へ柏高生が訪問することは入学者増の大きな鍵になると考える
地域での探究活動をさまざまな機関、特に丹波市の高校で連携し進めていきたい
例）氷上西地域の人に開かれた探究をしている（地域に出てお化け屋敷、出店など）
未来プロジェエクト氷上、西、柏原の３校で活動
提案）地域で成果を発表できる機会があれば良い
Ｑ１　３校で探究の成果を発表する機会があってもよいのでは？
丹波市教育委員会、３校の校長で音頭を取って進めていけないか？
→（校長）３校で協力をしていきたい
（藤江）：Q2 探究ルームはどう使っているか？
→（尾花）スタンディングディスクなどで会議がしやすくなる。探究の授業で使用
Q3 今後の探究ルーム整備の計画は何かあるか？
→（尾花）椅子、書籍などの整備を進めていきたい
（高畑）アメリカではラーニングコモンズが行われている、参考にしては？日本でも千里国際などの事例がある
参考；千里国際の図書館（どこからでも図書館にいくことができる、授業中でも）

４、新学科について　尾花部長より説明
１年生(本年の取り組みと来年度の計画)
・テキストを使用したミニ探究（１学期）
１学期の学びを利用した SDGs に関する基礎探究（２学期）
２学期の成果を発表（3 学期）
知の探究も普通コースも同じ形で進めていく
２年生（来年度の予定）
・昨年に探究で学んだことを使い、２年生では個人探究
・大学、地域との共同活動、成果発表を行いたい
・普通科１単位…グループ探究
知の探究…グループ、個人探究、丹波の森公園での最終発表
３年生
新３年での計画の説明
・探究発表と自己探究（１学期）
・２、３学期は教科探究で自分の興味のある教科の探究
・ポスター英語は教科横断型探究を考えている
（国語、英語を元に思考力を養う探究をしていきたい）

５、新学科に対する質疑応答
（高畑）：現在の大学生の問題点としてグループ学習から個人学習に繋げることができない。学生が多く自己反省のスキルが現在の大学生には少ない。
プレゼンテーションの能力は高いが、プレゼンテーションを聞いて議論やディスカッションができない生徒が多い。特に英語を使っての議論ができていない。
→この力を養うため探究をしていくことは理解できる。
Q ポスター英語は英語でポスターを作るのはかなり難しいがどう考えているか？
→教科横断型学習をする科目にしたい

・自然科学→応用科学→社会科学→人文科学のように階層になる
Q このようなことを踏まえて自分の興味あること以外も調べて、それを英語でポスターにするのか？
→現在どのような形にしていくかを検討している

５、全体を通しての質疑応答
（杉岡）：新学科を進めていく上でいろいろなブラッシュアップが必要
Q 真ん中の子に合わせたカリキュラムになり、もっと探究したいという子に対するアプローチとして、京都府の事例を活用してはどうか？
案①　学校のカリキュラムから外して、オンラインで大学の先生の指導をうけて探究を進める　（京都府で年間８単位実施）
案②　大学で自分の興味ある講義を早期履修の形で進める
問題点；高と大学の授業時間が合わないためオンデマンドになる。また、部活など生徒の負担増
案③　部活動で探究を進める→地域科学探求部のようなもので自己探究を進める
Q、兵庫県の取り組みとしてはなにがあるか？
Q、県を中心にそのような体制が取れるか検討できるか
（1 校ごとでやるのではなく県で進めていくべき）

（足立）地域の観光の視点から
・部活動での探究は良いと思う
・丹波市のことをもっと知ってから世界に出てほしい
・地域で活躍できる、また世界に出ても、丹波に貢献できる人材を育てるためもっと丹波のことをよく知るための活動があれば良い。
（事例紹介）
荒木浩史（ヒロフミ）さん　東京で活躍（市島出身）　　丹波ガイドを作成
→丹波が好きで丹波に貢献したいという人材を増やしていきたい
→いったん故郷を出た人が故郷の魅力に気づきやすい、そのためその人の力を利用できる仕組み作りも考えていきたい。

（藤江）Q 教科探究では指導要領に準拠するのか、または、生徒の興味関心に基づいてより難しいことをしていくのか？教員の配置はどうなるか？その教科の専門の教員がおけるのか
→（尾花）
生徒の興味関心に基づいてできるところまで進めていきたい。教科の教員の人員配置専門の教員が１人入れるように教務部に依頼、また、教員の専門を活かし、教員全体で関われるよう思案
（藤江）探究以外でも教科に向き合う時間も必要であり、生徒を教科に繋ぎ止めるのは教員であるため学校での協働も必要

６、今後の予定
R6　１月 25 日に「地域から世界を考える日」を予定　　場所；本校
午前；生徒の発表
午後；運営指導委員会
R6　３月７日
丹波の森公苑（会場は変更の場合あり）　　探究発表会

（６）第２回運営指導委員会

○日　時：令和６年１月２５日（木）　１４：００～１５：３０
○場　所：柏原高校　柏陵会館１階研修室　および　オンライン（Zoom）
○内　容
１　開　会（１０分）
■挨　拶：校長　荒木　和仁
兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事　上月　さやこ
■出席者紹介

２　報告事項
■令和５年度の成果および新学科設置に向けた取り組み（荒木校長）（１０分）
・新学科「地域科学探究科」のスクールポリシー
・設置検討体制の整備：研究推進部を中心に推進（教務部、総務部とも連携）
教育課程委員会（教育課程、教科横断的な学び等の検討）
コーディネーター配置、地域・関係機関との連携
・普通科改革支援事業指定校発表会での発表（京都市立開建高等学校）
・先進校視察（福岡県立八幡高等学校等）、コーディネーター研修への参加
・他府県からの学校訪問受け入れ…長崎県立松浦高等学校
愛知県立美和高等学校、愛知県立惟信高等学校
沖縄県立真和志高等学校、岡山県立勝山高等学校
大阪府教育委員会、大阪府立狭山高等学校
・情報発信・広報
中学校説明会（６月）、オープンハイスクール（８月・１０月）、
中学校への訪問と職員への説明（１０～１１月）、中高連携の強化、
ホームページ等で情報発信（総務部・情報担当）
〈質疑応答〉

■新学科の教育内容および各学年の探究授業…研究推進部より（１５分）
・１学年
・２学年
・３学年
・全学年共通（地域協働、国際交流、「地域課題から世界を考える日」等）
〈質疑応答〉

３　意見交換（４０分）
■新学科設置に向けた生徒募集の課題、
■各探究授業の内容、評価、改善について
■高校間連携および大学・行政・地域との連携の可能性、地域資源の活用
■本校教員の専門性向上を支援する研究やワークショップへの意見

４　今後の予定、その他（１０分）…研究推進部より
・令和６年２月１０日（土）「兵庫県高等学校探究活動研究会」（神戸コンベンションセンター）
・令和６年３月７日（木）午前「知の探究」発表会（丹波の森公苑）

５　閉　会

○第２回運営指導委員会　記録

出席者（敬称略）
高畑由紀夫(関西学院大学　名誉教授)　オンライン
杉岡　秀紀(福知山公立大学地域経営学部　准教授)　オンライン
藤江　康彦(東京大学大学院教育学研究科　教授)　オンライン
足立　環(丹波市観光協会　会長)
平瀬　憲利(丹波市教育委員会　学校教育課　指導主事)
中瀬　勲(人と自然の博物館　館長)
上月　さやこ(兵庫県教育委員会事務局高校教育課　主任指導主事)
荒木　和仁(兵庫県立柏原高等学校　校長)
髙橋　義尚(兵庫県立柏原高等学校　教頭)……進行
尾花　尚史(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部長)
原　孝拓(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部副部長)
津田　五台(兵庫県立柏原高等学校　研究推進部)　……記録
鴻谷　佳彦(コーディネーター)
一宮　祐輔(コーディネーター)
久保　哲成(コーディネーター)

１　開　会

■挨　拶：校長　荒木　和仁
兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事　上月　さやこ

■出席者紹介
高畑、杉岡、藤江は zoom 参加　　丹波市教委の小森→代理として平瀬が参加
→　高畑委員長がオンラインのため、進行を髙橋教頭に依頼、委員会で承認

２　報告事項

■Ｒ５年度の成果及び新学科設置に向けた取り組みの説明　（荒木校長）

①新学科「スクールポリシー」（県からの指導→修正版）説明
育成を目指す資質、フィールドワークや教科横断的な学習等

②普通科改革支援事業指定校発表会での発表（京都市立開建高等学校にて）　1 校 20 分
→週 33 時間ではなく、32 時間で足りるのかという質問があった。部活にも力を入れ、時間数を増やすことなく、カリキュラムを作っていく方針

③先進校視察（福岡県立八幡高等学校 11/8）…報告（原より）
・校内での協働態勢ができていた。八幡高校では雰囲気作りに時間がかかり、短期的には意識の改革は難しく、柏原高校では徐々に雰囲気を醸成していきたい。
・生徒に対して人生の中での学問という教え方。社会で力を発揮できる学問にしていく方針

④他府県からの学校訪問受け入れ
長崎県立松浦高等学校（9/21)、愛知県立美和高等学校・惟信高等学校（10/12)、
沖縄県立真和志高等学校（11/8)、岡山県立勝山高等学校（11/29)、
大阪府教育庁、大阪府立狭山高等学校（1/18)

⑤情報発信・広報
中学校説明会（６月 校長・教頭)、オープンハイスクール（８月・１０月)、
中学校への訪問と職員への説明（１０～１１月に研究推進部員の訪問)、
中高連携の強化、ホームページ等で情報発信（総務部・情報担当）

■新学科の教育内容および各学年の探究授業（研究推進部より）

①職員アンケートについて…回答数が増加(13⇒18)

探究の授業について…答えであるの当てはまる、やや当てはまるが増加

不安を感じる点について減少、指導に不安を感じる率も減少

→探究に対する理解の広まり見受けられたが、回答者が 18 名という点はまだまだ、探究への理解が低い側面もある。

②探究の進め方について

【１年生（１単位）】

前半：テキストを用いてのミニ探究で探究授業の手法を学ぶ

後半：丹波市の SDGs 宣言を用いて８つのテーマから探求を開始、探究の手法を復習し基礎実践

→ 記録集を作成しいつでも見ることができる状態に

【２年生（２単位）】

１組：興味関心に応じた個人探究

9 月に中間発表（神戸大学　小川ゼミ参加）

京都大学出前授業（吉野先生）→来年度も継続して公演予定

12 月　甲南大学リサーチフェスタ、東京学芸大学での発表

1 月　「地域課題から世界を考える日」・・・中止

3 月　知の探究発表会　丹波の森公苑にて

２～５組：６つのテーマに分け興味関心に応じたグループ探究

フィールドワークや発表等を行う

1 月　「地域課題から世界を考える日」の発表→中止　　別の機会で発表予定

⇒１～５組：発表まとめの冊子を作成→全員に配布

【３年生】

「グローカル」（本年度４名）：個人探究

東京学芸大学で発表、「地域課題から世界を考える日」での発表は中止

３　意見交換（質疑応答）

■杉岡

（意見）教職員アンケートについて…回答率が悪いので学校全体の意見を知るためには回答率を100%を目指すべき。

①ルーブリックについて、福知山の公立高校ではタブレットの中でルーブリックを作成、評価している。柏原高校ではどう評価しているのか？

・尾花→（回答）アンケートフォームを使用し、クラスで相互に評価、学年発表のために評価の順位もつけて学年発表に繋げる、コメントも記入欄があり、フィードバックも可。

②丹波市中学校でも探究的な学びをしているので発表会で交流等を行ってみては？

（小中学交流を行っていくべきではないか？）

・校長→オープンハイスクール等で来校した中学生に対して探究の発表、付近の小中学校と探究の発表会ができればと話し合いを行っている。

③丹波市議会ミライプロジェクト等で高校を超えた学びや交流ができないか？

各校で２名ずつ発表など高校間の連携はできないか？

・校長→ミライプロジェクト等 3 高で協力して進めていきたい。教員が発表会を見ることがあるが、生徒の発表会の交流はできていない。

■藤江

①PDCA サイクルで探究を考えると学年終わりのまとめが次の探究の出発になる。一貫性を持たせるために工夫は何かしているか？

・尾花→各学年が記録集をしっかりと残し、次の学年の目安や目標に、継承していく。

・藤江→記録集は下の学年の指針に、上の学年には研究の意義になる、柏原高校の探究の文化になるのではないか。

②アンケートについて、縦の一貫性、指導の引き継ぎについて　教員間の協働、引き継ぎ、意見交換など教員の不安など

・尾花→教員が生徒と一緒に探究を通して学んでいきスキルを高めていくプログラムを組んでいく。教科横断型探究について、プロジェクトチームを作り、八幡高校の動画等を共有、意見交換の場にしている、徐々に輪が広がってきている。

・藤江→教科横断についてはカリキュラムマネジメントも大切であるが教員間の協働も必要になる。統一した目標を持つ必要はないが、コーディネーター含め話し合える場を持ってはどうか。

■高畑

（意見）職員意識実態調査は数を増やしていけばより良いものになるのではないか、苦手と考えている教員に対する手立てやアドバイスにもつながる。　ただし回答数が少ないのでそこは課題。教員がどこに不安を思っているか、どの能力が不足しているかの把握につながる。年ごとの評価にもつながる。

①　「グローカル」の選択者が４名に減ったことに何か理由があるのか？

・尾花→具体的な理由は不明。特にモチベーションを上げる取り組みをしていきたい。

・高畑→特に一般クラスでも探究を通した授業ができれば行ってほしい。

■中瀬

①方法論や発信論を身につけた学生を企業は求めている。知識の切り売りではなく方法論や発想論を身につけさせてほしい。

②人博（人と自然の博物館）でも専門外の学問を先生が学び、改革に成功した。

③小さい博物館でネットワークを作り博物館の中でも大きく変化している。

■平瀬

①小中高連携について、中学校ではアントナプレナーシップを行っている。

母校（出身校）で探究発表や高校の紹介を行う

→中学生は高校生の先輩が学校のことを紹介してくれたと心に残る。積極的に行ってほしい。

■足立

①八幡高校の文系理系両方学ぶという点から、社会に出てからはそういう力も必要となる。

②生徒が夢を語る会で世界の人を救いたい、獣医になりたいと言っていた今の高校生は夢を持っている。

■上月

①P16「グローカル」の学校設定科目より

知の探究コースの生徒がいなかった

→今年度で知の探究コースが終わりのため、今までの総括や次の新学科につなげていく点をしっかりと考えていくべき。新学科では実践しながらどんどん新しいものを作っていってほしい

②アンケートについて

アンケートに答えており、授業の中でグループワーク等を取り入れている教員はさらに次の効果的なグループワークなどを考えていく。

■久保

もっとコーディネーターを使って、先生方の探究での悩み等を聞くなど活用を。

４　今後の予定（研究推進部より）

２月 10 日（土）　兵庫県高等学校探究活動研究会（神戸コンベンションセンター）
（９名参加予定）

３月７日（木）　知の探究発表会（丹波の森公苑）…ポスター発表、ステージ発表等
（１年１組・２年１組　知の探究コース）

３月　記録集の発行

５　閉　会

(7)視察訪問受け入れ

日　程	訪　問　団　体
9月21日(木)	長崎県立松浦高等学校 長崎県教育庁高校教育課高校魅力化班
10月12日(木)	愛知県立美和高等学校 愛知県立惟信高等学校
11月8日(水)	沖縄県立真和志高等学校
11月29日(水)	岡山県立勝山高等学校
1月18日(木)	大阪府教育庁教育振興室高校教育課教務グループ 大阪府立狭山高等学校
2月26日(月)	兵庫県立尼崎高等学校
3月1日(金)	東京都立篠崎高等学校

福岡県立八幡高等学校　視察報告

探究活動の先進校視察として、福岡県立八幡高等学校へ視察を行った。八幡高校が位置する地区では、少子化が進み、生徒数の減少が大きな課題となっている。その課題克服を目指し、魅力化の一環として探究活動へ力を注ぎ始めていた。土台のないところからのスタートで当初は担当教員の負担が大きかったそうだが、近年はうまくその負担を学年へと分散し、学校全体で探究活動を行う仕組みが醸成されている。探究活動のメインは第 2 学年である。第 1 学年では探究基礎力を身につける時期と位置づけ、本格的な活動は 11 月に先輩のプレゼンを見学するところから始まる。3 学期から先行研究を始め、2 年生の 4 月以降は企業や大学教授によるコメントをもらいながら行い、セレクションをくぐり抜けた班は代表として九州地区の発表会へ出場する。生徒の取り組みは大変前向きであり、8 名で 1 班を組む大所帯でありながら、会話に入らない生徒はほとんどおらず、全員が班活動へ積極的に参加していた。

視察において強く印象に残ったのは、受験だけを見て勉強をしていないところである。先の探究活動においても、生徒の行動の動機は受験のためではなく、自身が知りたいからであった。八幡高校の特色の 1 つである教科横断的な学習においても、「社会で力を発揮するには、理系的なことも文系的なことも両方知っておく必要がある。」と話されていたのが興味深い。受験が終わった後も生徒の人生は長く続いていく。受験だけでなく、その先を見据えた要素も授業の中に加えていきたいと強く感じた。

探究活動の必要性への理解が進む中で、どのようにその仕組みを作り上げていくかについて、大きな視座を獲得できた 1 日となったと感じている。

２. 各学年の取り組み

（１）第１学年「探究Ⅰ＆丹 BALⅠ」

年間計画

日程		行事	学習内容
4 / 20	木	探究学習って何。	オリエンテーション（研究推進部）
4 / 27	木	情報を収集しよう。①	仮説を立てて、それを実証するための情報収集をする。 メディアリテラシー
5 / 11	木	情報を収集しよう。②	
5 / 25	木	整理・分析しよう。①	シンキングツール（p34，35）の確認。ブレストを経験。 問に対してきちんと答えられているか。
6 / 1	木	整理・分析しよう。②	
6 / 8	木	課題を設定しよう。①	自分の身近なところにある疑問を挙げる。（量重視） 疑問を細分化し、具体的な問に磨き上げる。
6 / 22	木	課題を設定しよう。②	自分の身近なところにある疑問を挙げる。（量重視） 疑問を細分化し、具体的な問に磨き上げる。
7		まとめ・表現しよう。①	論理的に相手へ伝えること。どのように表現するか。 聞き手の立場に立った表現になっているか。
7		まとめ・表現しよう。②	
9 / 7	木	SDGs⇒14番について	世界の問題（SDGs）について調べながら、No. 14について話を絞っていく
9 / 14	木	SDGsから丹波市の取り組みの「ゼロカーボンシティ宣言」まで	世界の問題（SDGs）の丹波市の取り組みについて調べていき8つの目標があるところまで
9 / 21	木	丹波市ゼロカーボンシティ宣言の8つの目標について	8つの目標のどんなところがゼロカーボンになっているのかを調べていく。
9 / 28	木	丹波市市役所講演 ゼロカーボンシティ宣言について	市役所の話を聞いて8つの内、どの目標について研究をするのかの調査をし、それをもとに班分けをする
10 / 5	木	探究基礎実践①テーマ設定① 組別活動開始	テーマ・問い・仮説の設定について1学期の振り返り テキストを見ながら決め方を確認
10 / 12	木	探究基礎実践②テーマ設定②	テーマ・問い・仮説の設定 テキストを見ながら決め方を確認
10 / 26	木	探究基礎実践③テーマ設定③	テーマ・問い・仮説の設定 テキストを見ながら決め方を確認
11 / 9	木	探究基礎実践④情報収集①	仮説の証明に必要な情報収集 先行研究から知識・論理を学習
11 / 16	木	探究基礎実践⑤情報収集②	仮説の証明に必要な情報収集 先行研究から知識・論理を学習
11 / 30	木	探究基礎実践⑥分析調査①	必要なデータの精選 データを集約し、仮説を検証
12 / 11	月	探究基礎実践⑦分析調査②	必要なデータの精選 データを集約し、仮説を検証
12 / 20	水	探究基礎実践⑧まとめ①	発表用スライドへ整理 聞き手を意識した発表になるように原稿作成
1 / 11	木	探究基礎実践⑨まとめ②	発表用スライドへ整理 聞き手を意識した発表になるように原稿作成
1 / 18	木	探究基礎実践⑩まとめ③	発表用スライドへ整理 聞き手を意識した発表になるように原稿作成
1 / 25	木	地域課題から世界を考える日	1年間の成果発表 周りの発表から、取り組み方を学ぶ
2 / 8	木	探究基礎実践記録集作成	まとめの作成 探究学習を通して学んだことを翌年度以降へとつなぐ

備考

7、12，3月は短縮時程のため未定。7月6日、13日・12月14日・3月7日に該当日あり。

1 学年活動報告　　研究推進部　原　孝拓

第 1 学年では、探究を行うための技法の習得に力を注いだ。1 学期を技法の解説、2 学期以降は習得した技法の実践期間と置き、1 月の「地域課題から世界を考える日」での全体発表を目指した。教科学習と異なり、明確な答えがないことで戸惑いを感じる生徒も少なくなかったように思う。しかし、自身の躓きを班員に説明をしたり、分からないことを様々な角度から見て論証しようとしたりと随所に探究者として光る側面が見られ確かな成長を感じられた。技法ももちろん必要であるが、粘り強く各自で取り組んだこの姿勢を将来も大切にしてもらいたい。

1 学期の技法の習得では、特に情報収集、整理・分析、課題設定の 3 つに絞り、講義→演習の形で授業を行った。購入したテキストにのっとり学習を進めたことで、教員も生徒もわからなくなった時の拠り所ができたため、学習が進めやすかったように感じている。技法としては課題設定が最も躓きが多かった。探究学習が進められないほど規模が大きな課題や、逆に少し調べれば簡単にわかってしまうような小さな課題を設定してしまうため、教員側の伝え方や匙加減の難しさを感じた。2 学期以降は、SDG s の 13 番を軸に、丹波市のゼロカーボンシティ宣言（食事、節水、節電、分別、ファッション、脱炭素製品、再生可能エネルギー、移動）に関する講座を市役所の方にしていただき、生徒の希望に沿って各講座への振り分けを行った。自身の興味関心に合わせたテーマを設定し、問題点を見つけ出し、探究した。間に入る行事が多く、時間が細切れになることが多かったため、昨年度のようにテーマ別の講師からお話を聞く機会が作れなかったがそんな中でも 1 学期に学習した技法を生かし、1 月の「地域課題から世界を考える日」で今年度の成果発表を行った。

1 年を通して体系的に学習を進められたことが教員側の大きな成果であると感じている。課題設定の難易度を感じ、その点に関しては注意深く見守ることができたが、探究内容のブラッシュアップまではなかなか手が回らなかった。教員数に対し、総数が多いため、全体的な把握が困難でなおかつ時間が不足した。担当者、担任、コーディネーターと連携し、ICT の活用法を考えながら授業設定を行えるようにしたい。

探究Ⅰ＆丹 BAL Ⅰ活動報告　　1 年 2 組担任　小村　早代

1 年次の探究Ⅰ（1 年 1 組）・丹 BAL Ⅰ（1 年 2 ～ 5 組）では、2 年次での本格的な探究活動に向けて、探究活動の流れと必要なスキルを学んだ。

1 学期には、まず情報収集の仕方、そして収集した情報をどう整理・分析するかを学んだ。講義形式で要点を学習した後、個人またはグループ活動で実践する形式がとられ、生徒は学習した内容から考えたり、友人と協力して考えたりしながら、真剣に取り組んでいた。情報収集の際は、「最適な昼食とは？」という問いを用いて、やみくもに調べるのではなく、自分なりの仮説をたて、それを検証できるようなデータを集めることを実践した。また、同じ情報やデータでも、さまざまな視点で見ることができるため、「仮説を検証する」という視点で分析する必要性を学んだ。その後に課題の設定方法を学習した。自分の興味・関心のある単語からスタートし、ウェビングマップを用いて広げながら疑問に思うことを列挙した。調べればすぐに答えが見つかりそうなもの、逆に検証が難しいものは探究活動の課題として避けた方がよい、と学んだが、それを判断することは容易なことではなく、課題設定の難しさを感じた。

2 学期には，丹波市ゼロカーボンシティ宣言の各テーマに沿って探究活動を行った。8 つのテーマから

生徒が自由に選択し、クラス内で数人ずつのグループに分かれて活動を行った。生徒が時間をかけていたのは課題設定の場面であった。まずは自分たちでテーマに関する事柄を調べて知識を得たり、１学期に行ったウェビングマップを用いたりしながら、自分たちで課題を設定していった。基本的にはクラス内で活動していたが、適宜巡視している担当教員やコーディネーターからさまざまな視点のアドバイスを受けられた。全グループが１月 25 日の「地域課題から世界を考える日」で発表する機会があり、調べた内容を他者にわかりやすく伝えるために、スライドや発表原稿を作成した。

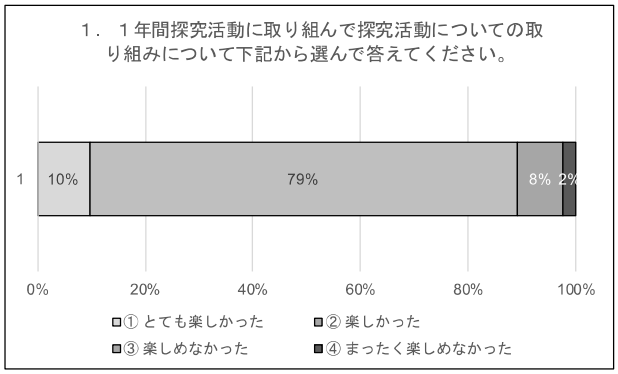
２学期以降の時間数が少なく、探究活動があわただしいものになってしまったが、２年次での本格的な探究活動に向けて、経験を積むことができたと思う。

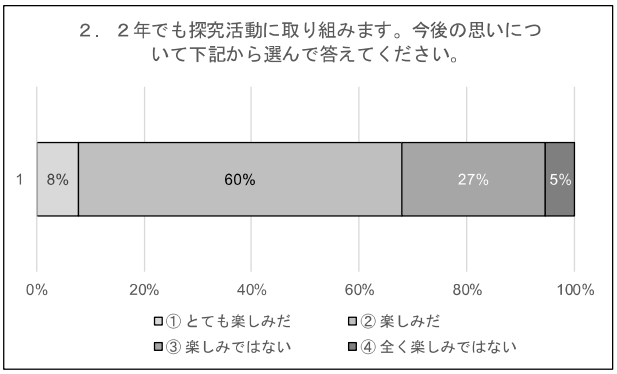
令和5年度「探究Ⅰ＆丹BALⅠ」1年間の振り返り結果

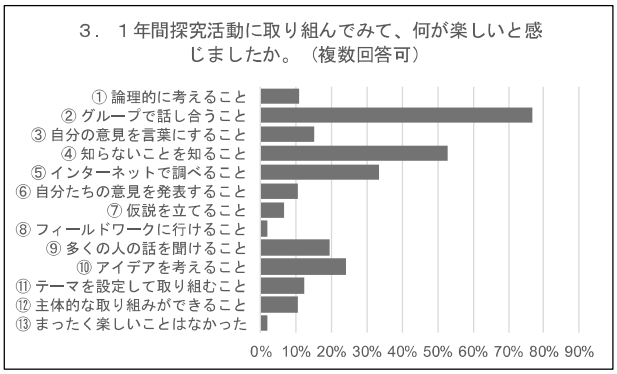
【調査目的】

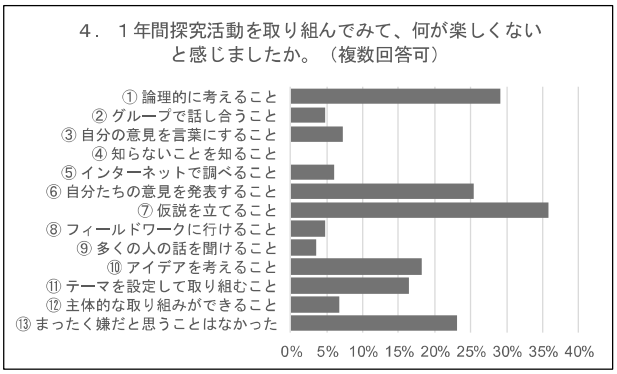
本年度は、来年度から新学科が改編されるにあたって、3年間を見越した探究活動のプログラムの構築に最大限の労力を費やしてきました。

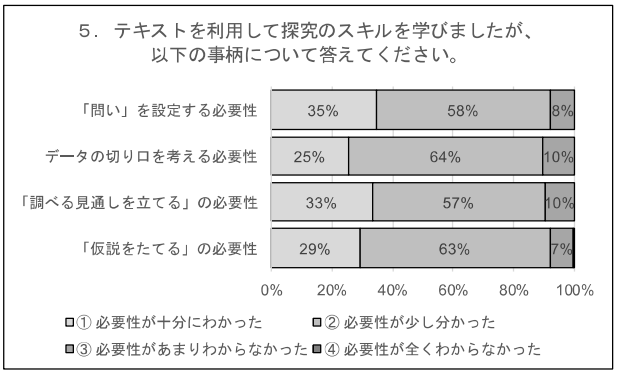
その成果として、今年度の生徒たちの満足度や理解度を調査することにより、来年度以降に生かしていくため、以下の調査を実施しました。また、来年度以降も同調査を繰り返すことにより、経年変化からより効果的な探究のプログラムの構築をめざします。

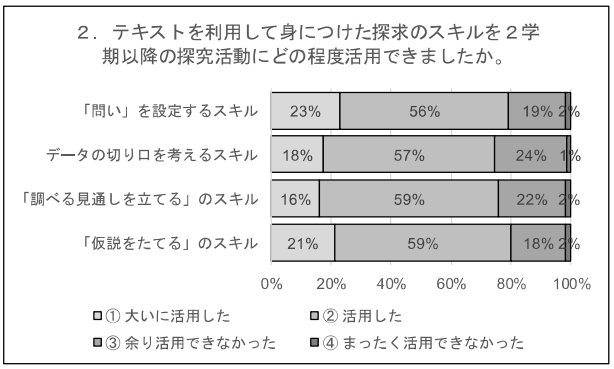












（２）第２学年「探究Ⅱ」

年間計画

月	日	曜日	内容（2時間連続）
4	13	木	オリエンテーション・テーマ設定
	20	木	優秀作品から学ぶ・テーマ設定・計画表作成
	27	木	テーマ設定・計画表作成
5	11	木	テーマ設定・計画表作成
	25	木	テーマ設定・計画表作成
6	1	木	個人研究①
	8	木	個人研究②
	15	木	個人研究③
	22	木	個人研究④
7	13	木	個人研究⑤
9	7	木	中間発表会①
	14	木	中間発表会②
	21	木	中間発表会③ ※神戸大学小川ゼミが訪問
	28	木	中間発表会④
10	5	木	京都大学出前講座「工学研究科 持続可能なまちのみらいをデザインしよう!」
	12	木	中間発表を振り返って
	26	木	個人研究⑥
11	9	木	個人研究⑦
	30	木	まとめ①
12	15	金	まとめ②
	17	日	東京学芸大学「探究の共創」/甲南大学リサーチフェスタ2023　出場
1	11	木	まとめ③
	18	木	まとめ④
	25	木	活動報告会 「地域課題から世界を考える日」
2	8	木	振り返り・活動報告集作成
	10	土	令和5年度兵庫県立高等学校探究活動研究会 出場
3	1	金	まとめ⑤
	4	月	発表準備
	7	木	「知の探究」発表会